
コミュニティ心理学を考える

— Martin-Baro (2) —

藤 信子

前回からの続きで、Martin-Baroの仕事とその影響について見ていく。1980年代には彼の名声は高まった。国内でも国際的な行事においても、基調講演を依頼されたが、エルサルバドルでは、保守的な同僚からは、共産主義者あるいは破壊分子と非難された。変革の手段としての心理学の役割についての彼の見解や、「解放の心理学」は、市民のエンパワメントと不正義への闘いを強調した。そこには解放の神学とブラジルの教育学者のパオロ・フレイレの影響があった。その考え方の基本

には「貧しい人々に寄り添う選択」をしたこと、彼らが抑圧された歴史の中で、自分を見出していくことをエンパワーする方法は、当時の政府を含む支配階級にとっては、敵対的なものとうつつた。彼がきわだった悪評を得たのは、カラカス（ベネズエラ）での第20回アメリカ大陸心理学会大会においてであった。

一方、心理学によりコミットし批判する見解を同じくする友人 Martitza Montero はハバナ（キューバ）で開催されたアメリカ大陸

心理学会の中央アメリカおよびカリブ海諸国大会に、彼を招待した。

Martin-Baro にとって、旅行はアカデミックな知識人にとっての特典ではなかった。公開の目の中にいることで生き残る方策であり、戦争の残虐行為とサルバドル政府が合衆国の援助を受けて苦しめている人権侵害を弾劾できる証人として働く方法だった。彼は合衆国の国民に彼らの政府が「裏庭で」何をしているのかを知らせるために、頻繁に合衆国に行った。そして活動主義の心理学者の Adrienne Aron(“ Writings for Liberation Psychology” の英訳者の一人)と M. Brinton Lykes と親しくなり、2 人が彼が訪ね、話をするとところを準備した。

エルサルバドルの内戦が始まる前から、Martin-Baro の合衆国に対する気持は、愛と憎しみのアンビバレンツなものだった。北アメリカの外交問題について熟知していたため、そこからの来るもの殆どすべて、合衆国で作られた心理学も含め、疑っていた。合衆国で学んだことは、敵を内部から知ることになった。彼の 2 つの主な仕事 “Action and Ideology”(「行為と意識形態」) (1983) と “System, Group ,and Power”(「組織、集団そして権力」) (1989)、において、ラテンアメリカで得られる心理学についての理論的な本の中では、稀な北と南の対話を開いた。彼はアメリカの心理学へ鋭い批評を述べるだけでなく、そこから離れるための挑発的な方法も

提案している。その確固たる考えが表れた局面が、英語が流暢であるという事実にも拘わらず、スペイン語だけで書くという彼の決心であった。そのことが、不幸なことに彼の著作が、合衆国やその先の英語圏の研究者に知られないという危険が生じた。

彼と連帯感を持つ友人や同僚は、注意するように、そして可能なら国を離れるようにと忠告した。彼は一流の研究所からのいくつかの仕事の申し出を断り、その代わりに本の製作、旅行資金そして道徳的な支持を頼んだ。大学の生活の中でのコミュニケーションの他のチャンネル、El Salvador Journal of Psychology などのような専門の機関紙、グループで編集する本、そして編集委員会などを始めた。ベネズエラ、プエルトリコ、スペイン、コスタリカの大学への短い訪問の任務は引き受けた。

経歴の最後までに、彼は 1 ダースほど本と 100 あまりの論文を編集し、書いた。彼は解放の心理学 (1986) と名付けたことの開拓者としてよく知られることとなった。政治的で批判的社会心理学が切望されるべきものというのが彼の提案である。

1987 年の初め、エルサルバドルの状況は非常に困難になったので、彼は短い期間隠れなければならなかった。同じ年にキューバで英国の心理学者の Arison Harris にキューバの国営 TV に出ることを断っている。TV に出ることによって、エルサルバドルにおける報

復を招く可能性があるためだった。

1989年にスペインに行った時、彼の兄弟の Carlos は彼が非常に神経質で疲れていることを知った。47歳の誕生日の2週間前の1989年11月16日の早朝、政府軍の精鋭部隊が5日前から始まった FMNL (ファブランド・マルチ民族解放戦線) のゲリラによって始まった大きな作戦を口実に、大学のキャンパスと、イエズス会士の住居に押し入った時には、彼はすでに起きて原稿を書いていた。政府軍部隊は、UCA(University of Central America) の総長であり神学校の校長である Ignacio Ellscuria を殺し、目撃者を誰一人残さないように命令されていた。6人のイエズス会神父と彼らの料理人とその娘が殺された。

1990年彼の同僚や友人たちによって「精神保健と人権のための Ignacio Martin-Baro 基金」が設立された。以下の彼のことが、

この基金を説明している。

「個人の障害としてか、それとも (戦争による) 社会的相互作用の悪化によるか、どちらにしろ、それ自体重大な社会的障害で、我々の仕事や愛、我々自身の独自のアイデンティティを主張するような、人々の歴史の中で我々の個人的なそして共同の物語を語るための、そのような集団の能力の腐食である。このような理由で、問題は戦争によって生じた破壊や混乱に取り組むことに限定しない。問題は新しい社会の新しい人を構成することである」 (Ignacio Martin-Baro)。

文 献

Portllo, N. (2012) The Life of Ignacio Martin-Baro: A Narrative Account of a Personal Biographic Journey. *Journal of Peace Psychology*. 18(1), 77-87.

[Http://www.martinbarofund.org/](http://www.martinbarofund.org/)